

Baryon as a Linearized Yukawa Non-Local Field

伊藤 大 介 (埼玉大理工)

Introduction

多種の粒子を統一的に記述するため、粒子を内部の固有状態として記述整理し、これから逆に内部空間の微視的構造や法則を探ることがひろく行はれている。初等量子力学にたとえば、コマや水素原子や共鳴状態のレベルのようなものに粒子の種類が対応させられるわけであるが、同じく初等量子力学の範囲内で、新しい粒子の存在を予言した少し変った実例に Dirac の Positron がある。ここでは Spin を導くために Klein-Gordon 方程式を 1 次化して得られた余分の自由度として Positron が得られた。新粒子の自由度を理解するのにこのような可能性が残っていないだろうか？これについてはあまりしらべられていないように思うので、(柳の下にはもうどじょうはいないかも知れないが)ここではその方向に探りを入れてみることにしよう。

調和振動子を内蔵する Yukawa N.L.F.

$$[P_{\mu}^2 + M^2 + \frac{1}{2}(\tilde{p}^2 + \omega^2 \tilde{\xi}^2)]Y(x, \tilde{\xi}) = 0 \quad (1)$$

は Regge Pole, Linear Trajectory, Form Factor などの記述に都合よかつたので、これから出発する。しかし、このままでは半整数スピンの Baryon の記述には適しないので、Dirac に倣って一次化によつて Spin や反粒子を導入することにしよう。但し一次化は重心変数のみならず内部(相対座標)変数についても行はなければならない。従つて Dirac の場合より多くの自由度の場が得られることになり、これが Strangeness などの自由度に対応することを示そうというのが Motiv である。

1 次化

簡単のため、振動は重心運動 P_{μ} に垂直な方向とする。すなわち、

-526-

$$\tilde{\xi}_\mu = \xi_\mu - \frac{(P \cdot \xi)}{P^2} P_\mu, \quad \tilde{p}_\mu = p_\mu - \frac{(P \cdot p)}{P^2} P_\mu \quad (2)$$

とする。内部振動の生成消滅演算子

$$\tilde{A}^* = \frac{\tilde{p} + i\omega\tilde{\xi}}{\sqrt{2\omega}}, \quad \tilde{A} = \frac{\tilde{p} - i\omega\tilde{\xi}}{\sqrt{2\omega}} \quad (3)$$

を導入すれば(1)は

$$[P^2 + M^2 + \frac{\omega}{2}(\tilde{A}^* \cdot \tilde{A} + \tilde{A} \cdot \tilde{A}^*)]Y(\chi, \tilde{\xi}) = 0 \quad (4)$$

となる。さて

$$r \cdot \tilde{A}^* r \cdot \tilde{A} + r \cdot \tilde{A} r \cdot \tilde{A}^* = \tilde{A}^* \cdot \tilde{A} + \tilde{A} \cdot \tilde{A}^* \quad (5)$$

であるから(4)は

$$[(M - ir \cdot P)(M + ir \cdot P) + \frac{\omega}{2}(r \cdot \tilde{A}^* r \cdot \tilde{A} + r \cdot \tilde{A} r \cdot \tilde{A}^*)]Y = 0 \quad (6)$$

とかける。(M - ir \cdot P)で割り、

$$[r \cdot P, r \cdot \tilde{A}]_+ = [r \cdot P, r \cdot \tilde{A}^*]_+ = 0 \quad (7)$$

であることに注意すれば

$$[M + ir \cdot P + \frac{\omega}{2}(r \cdot \tilde{A}^* \frac{1}{M + ir \cdot P} r \cdot \tilde{A} + r \cdot \tilde{A} \frac{1}{M + ir \cdot P} r \cdot \tilde{A}^*)]Y = 0, \quad (8)$$

が得られる。ここで

$$\sqrt{\frac{\omega}{2}} \frac{1}{M + ir \cdot P} r \cdot \tilde{A} Y \equiv N, \quad \sqrt{\frac{\omega}{2}} \frac{1}{M + ir \cdot P} r \cdot \tilde{A}^* Y \equiv E \quad (9)$$

とおけば(8)と(9)は

$$(M + ir \cdot P)Y + \sqrt{\frac{\omega}{2}}(r \cdot \tilde{A}^* N + r \cdot \tilde{A} E) = 0$$

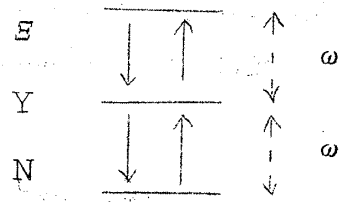
$$\left. \begin{aligned} (M + i\mathbf{r} \cdot \mathbf{P})N - \sqrt{\frac{\omega}{2}} \mathbf{r} \cdot \tilde{\mathbf{A}} Y &= 0 \\ (M + i\mathbf{r} \cdot \mathbf{P})\mathcal{E} - \sqrt{\frac{\omega}{2}} \mathbf{r} \cdot \tilde{\mathbf{A}}^* Y &= 0 \end{aligned} \right\} \quad (10)$$

となり、これが重心及び内部変数について一次の式である。

Interpretation (10) は

$$\left. \begin{aligned} (M + i\mathbf{r} \cdot \mathbf{P})N &= i\mathcal{E} \mathbf{r} \cdot \tilde{\mathbf{A}} Y \\ (M + i\mathbf{r} \cdot \mathbf{P})Y &= i\mathcal{E} (\mathbf{r} \cdot \tilde{\mathbf{A}} \mathcal{E} + \mathbf{r} \cdot \tilde{\mathbf{A}}^* Y) \\ (M + i\mathbf{r} \cdot \mathbf{P})\mathcal{E} &= i\mathcal{E} \mathbf{r} \cdot \tilde{\mathbf{A}}^* Y \end{aligned} \right\} \quad \mathcal{E} \equiv \sqrt{\frac{\omega}{2}}, \quad (11)$$

とかくことも出来る。これは3つのDirac Yukawa N.L.F. の内部振動のCouplingを記述する。そのInteractionのSchemeは右の図の通りである。YはN, \mathcal{E} はYの one quantum excited state だから level spacingは ω



となるであろう。 \mathcal{E} とNは直接Coupleしていない。これらのことから(11)はBaryonとK-meson CloudのCouplingに似ていることがわかる。従つて、NをNucleon, Yを(A, \mathcal{E}), \mathcal{E} を \mathcal{E} と考えてよさそうである。(11)からN, \mathcal{E} を消去すればYの式は当然(4)に戻るから、Yは

$$M_Y^2 = M^2 + \omega \left(J + 2n_r + \frac{3}{2} \right) \quad (12)$$

なるMass Formulaをもつことになる。従つて、N・Y・ \mathcal{E} にはそれぞれ同じ傾きのLinear Trajectoryが対応することになる。そのGround stateの内部波動関数はGaussianである。

Isospin and U(3)-Form

このままの簡単なModelではChargeの自由度はない。従つて不本意でもこれは導入するより仕方がない。 $\tilde{\mathbf{A}}, \tilde{\mathbf{A}}^*$ が isoscalar なら(11)から NY \mathcal{E}

はすべて同じ isospin をもつことになる。N が isospin $\frac{1}{2}$ をもつ理由を内部に求めるとすれば最も経済的な仮定は \tilde{A} を $\frac{1}{2}$ isospin に対応する 2 種の oscillator と考えることであろう。このときは、 \tilde{A} は益々 K-Meson に似てくるので (11) の最も簡単な Charge independent な拡張は

$$\left. \begin{aligned} (M + ir \cdot P) N_\alpha &= i g r \cdot \tilde{A}_\beta Y_{\alpha\beta} \\ (M + ir \cdot P) Y_{\alpha\beta} &= i g r \cdot \tilde{A}_\beta \varepsilon_\alpha + i g r \cdot \tilde{A}_\beta^* N_\alpha \\ (M + ir \cdot P) \varepsilon_\alpha &= i g r \cdot \tilde{A}_\beta^* Y_{\beta\alpha} \end{aligned} \right\} \quad (13)$$

であろう。これによつて、N, Y, ε と Baryon の対応は一層改善される。しかし望ましいことは Charge 導入の可能性を制限する原理的要求を見出すことであるがこれについては目下何も持ち合はせていない。

最後に (13) を U(3) の立場から眺めてみよう。いま、 $\alpha, \beta, r = 1, 2, 3$ として

$$(M + ir \cdot P) \psi_\alpha^\beta = i g (A_r^\beta \psi_\alpha^r + A_r^\alpha \psi_r^\beta) - \text{trace}, \quad (14)$$

を考え、 A_α^β は $A_\alpha^3, A_3^\alpha (\alpha=1, 2)$ なる原素のみをもち、他はすべて零であるものとし、 $\alpha=1, 2$ 、として (14) を成分に分離すれば

$$\left. \begin{aligned} (M + ir \cdot P) \psi_\alpha^3 &= i g \psi_\alpha^\beta A_\beta^3 + i g A_\alpha^3 \psi_3^\beta \\ (M + ir \cdot P) \psi_\alpha^\beta &= i g \psi_\alpha^3 A_3^\beta + i g A_\alpha^3 \psi_3^\beta \\ (M + ir \cdot P) \psi_3^\alpha &= i g \psi_3^3 A_3^\alpha + i g A_3^\beta \psi_\beta^\alpha \end{aligned} \right\} \quad (\alpha, \beta = 1, 2) \quad (15)$$

となる。ここで

$$\left. \begin{aligned} \psi_\alpha^3 &\equiv N_\alpha, & \psi_3^\alpha &\equiv \varepsilon_\alpha, & \psi_{\alpha\beta} &\equiv Y_{\alpha\beta}, & \psi_{33} &\equiv Z \\ A_\beta^3 &\equiv r \cdot \tilde{A}_\beta, & A_3^\beta &\equiv r \cdot \tilde{A}_\beta^* \end{aligned} \right\} \quad (16)$$

とおけば (15) は

$$\left. \begin{aligned}
 (M + i\mathbf{r} \cdot \mathbf{P}) N_\alpha &= i\mathbf{r} \cdot \tilde{\mathbf{A}}_\beta (Y_{\alpha\beta} + \delta_{\alpha\beta} Z) \\
 (M + i\mathbf{r} \cdot \mathbf{P}) Y_{\alpha\beta} &= i\mathbf{r} \cdot \tilde{\mathbf{A}}_\beta^* N_\alpha + i\mathbf{r} \cdot \tilde{\mathbf{A}}_\beta \varepsilon_\alpha \\
 (M + i\mathbf{r} \cdot \mathbf{P}) \varepsilon_\alpha &= i\mathbf{r} \cdot \tilde{\mathbf{A}}_\beta^* (Y_{\beta\alpha} + \delta_{\alpha\beta} Z)
 \end{aligned} \right\} (17)$$

これは ($Z=0$ とすれば) (13) と同じである。

このように (14) は一応 $U(3)$ -tensor の形にかけるが、 T_3^α, T_α^3 -element しかもたない Spurion 的な $\tilde{\mathbf{A}}, \tilde{\mathbf{A}}^*$ を含むので、 $U(3)$ 対称ではない。これは (13) が既に Baryon Mass の分離を含んでいるから当然である。

Conclusion 以上で実験的に見出されているが、未だ適切な説明のない Linear Trajectory を内部 Oscillator の Mass Level として記述出来る Yukawa N.L.F. を仮定し、これを 1 次化することによつて Baryon (strangeness) の自由度を Dirac 流に導くことを試みた。Charge は Charge independence と内部 charge 自由度を最も経済的に仮定することによつて導入せざるを得なかつた。

思いつきの段階であり、検討すればいろいろ不備も多いと思うし、勿論他にも多くの可能性があると思うが、このような方向への可能性の一例として報告した次第である。(Dec. 8, 1968)